



本部漁業協同組合

我 部 政 祐

中学卒業と同時に追い込み漁グループの一員となり、水深50mから先輩達と二緒に追い込みを仕掛けるのですが、魚を追いつきながらも、最初の頃の水深50mという海の深さへの恐怖心は今も忘れることができません。また、漁を終え、浜で捕れたての魚を刺身で食べた時のあの感動は鮮明に憶えています。漁の緊張と深い海への恐怖心が消え去り、と同時に無事浜に戻れた安堵感、そのすべてがあの刺身の味に凝縮していたように思えます。

1955年に沖縄では、朝鮮戦争の影響からスクラップブームが湧き起こりました。海底に沈む戦時中の残骸を素潜りで回収するのですが、県内を転々としながら回収作業を仕事にし、最終的には爆弾回収作業もやりました。しかし、読谷村などで暴発事故もたびたび起こり、この仕事に見切りをつけ、1957年から再び追い込み漁に戻り海人とし再スタートしました。その頃は、

パンツ丁に木の眼鏡、網も木綿製で網目が細かいので、追い込み網のそで網を引き揚げるのに大人8名〜10名の人力が必要です。そこで、私はそで網を引き揚げるのに空気を入れた袋を取り付け、水面に浮上させる方法を考案しました。この方法は、かなりの労力軽減となり、宮古島の伊良部等で現在も活用されているようです。

次第に追い込み漁にも余裕ができ、回りが見え始めたその頃、海のきれいは自然豊かで生物の多様性に富み、透明度も深く、海藻が溢れ、サンゴが表現できない程に群生していたのを記憶しています。しかし、1959年〜60年にかけてサトウキビ、パイナップルに栽培され始めました。その頃から赤土が川を通り海への流入が目立ち始め、時を同じくして本部町ではリゾート開発事業が盛んになり、さらに沿岸の汚染に拍車がかかりました。赤土汚染の状況は、残念ながら今も変わらずに続いており、心の痛い状況です。そんな中、1965年からは観賞用魚の採捕を始めました。毎日魚を追いかけて、魚の習性を知ろうと季節や潮、天候によつて魚がどの様に行動するのかを懸命に勉強しました。

1972年に本土復帰となり漁業権が設定されました。これまでのように自由にどこでも漁業を行うことが出来ない、海人にとっては大きな時代の変革でした。その頃に恩納村におけるモズク養殖の成功を新聞紙面で読んだのですが、それはちょうど赤土汚染によつて海の汚れがひどく、魚も激減し、捕る

Series

12

地 域 の 目

「海と共に生きる」

漁業を続けていくことに不安を感じ始めた頃でした。そのような中でモズクと出会い、本部町でのモズク養殖に取り組み始めたのです。琉球大学の香村先生に、瀬底島にある琉大実験場でモズク養殖方法を丁寧に教えて頂き、その時に実験場で手にした「モズクの一生」というパンフレットを読み進めるうちに、モズク養殖に興味を湧き起こりました。当初は、養殖方法がまったく分からず、手探り状態でのスタートでしたが、香村先生には本当にお世話頂きました。

ところで、本部町の海は、もともと天然モズクが少なく、漁場が狭いうえに遠いという悪条件です。このような環境条件の中でどうすればモズク養殖を成功させることができるのか探求の日でした。そんな中で三段階移植法という方法が生まれました。この方法は、苗床・中間育成場・本張り養殖場の場所を変えることで生長停滞が解消し藻体が伸長します。また、移動することにより雑草が消失するという利点がありました。この方法でモズク養殖をやっていくことで生産量も増加し、生活も安定してきました。その頃、県の試験機関でフリー盤状体採苗法が開発されました。これは、モズク種を純粋培養し、網へ種付けする方法です。そのおかげで、イトモズクの養殖も可能となり、イトモズクの中層浮式養殖法を開発しました。

モズクには、本モズク（オキナワモズク）とイトモズクがあります。これらは、同一場所での養殖はできません。なぜなら、養殖網への混入が起こり、商品価値が

まったくなくなるからです。このために漁場、漁期を分ける必要がありますが、先述のとおり本部には限られた漁場しかないために、漁場として利用していない海域、すなわち水深の深い場所をモズク養殖場として活用することにしました。この方法は、ロープとテンカー、浮きを使つてモズク網の固定施設を水深の深い所に設置するという方法です。本部町のモズク養殖は、漁場が狭い海域でも順調に養殖することが可能となったのです。

1988年沖縄県から漁業士認定を頂き、2003年には名誉漁業士としても認定を頂きました。振り返れば、追い込み網漁業、モズク養殖漁業とおして沖縄県の水産業に貢献できたことは、海人冥利に尽きます。その中で、今後も太くて質の良いモズクの生産のために解決したい課題は、たくさんあります。これからの気力と体力の続く限り、生海人としてその課題解決に頑張っていきたいと思います。ただ、私が今、最も問題と考えることは、赤土の流入による沿岸環境の破壊です。この問題は、海人全体の問題であり、沖縄の将来に大きな禍根を残すのではと危惧しています。

さて、私のこれまでの歩みは、本部町で生まれ育ち、知人、友人に恵まれ、自然を相手に仕事できたことに始まります。また、恩納村、知念村の先輩海人の皆さんや水産関係機関の方々との出会いと協力、ご支援の賜であったと思います。改めてこの場を借りて感謝申し上げます。

（平成20年度沖縄振興功績者表彰受賞者）